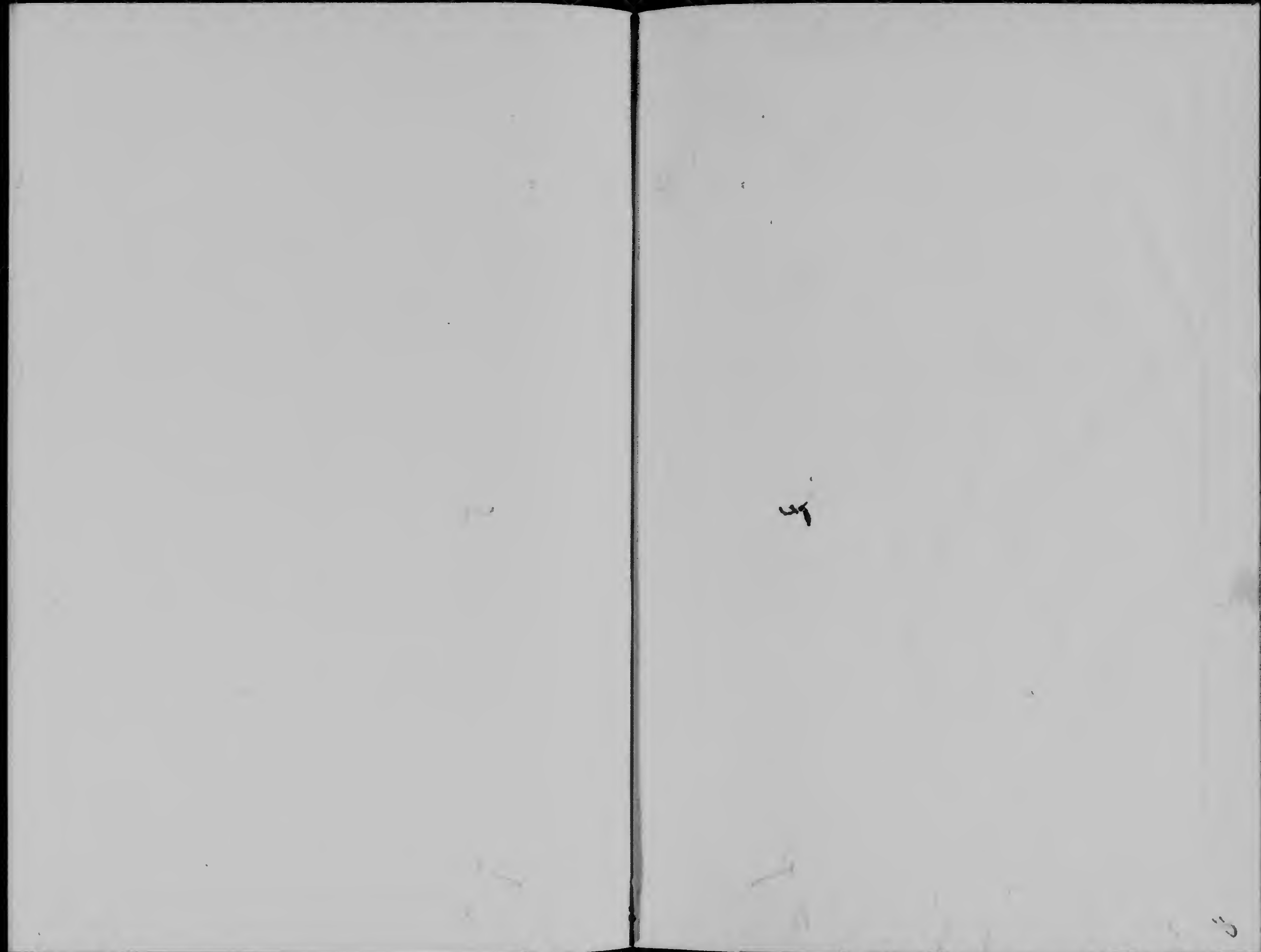


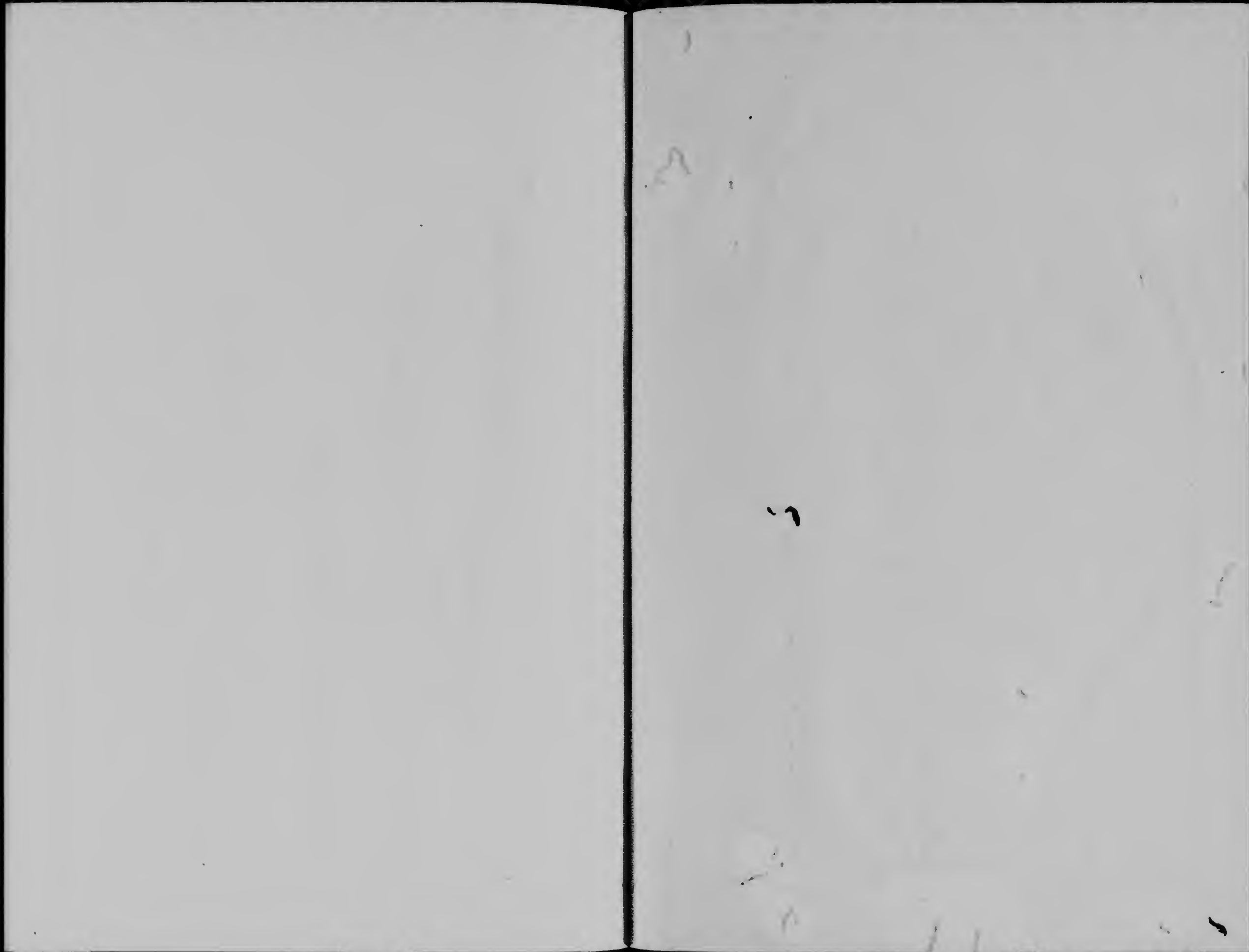
六部書十番



| | | | |
|-------|------|--------|-----|
| 庫 | 文 | 閣 | 内 |
| 一五二函架 | 三九二冊 | 三二五九九號 | 和書類 |

内閣文庫
番號 和 35563
冊數 394 (326)
函號 152 121





寛永九年八月八日

九毛内通利久三男

御代御小姓

大洲藩月夜石見守祖之定 九毛六郎清利好

後三右左

寛永十年二月七日利忠三右左

上三右左

寛永十六年十月八日御腰物持彼

兼寛元辰年十月十日新御番

中根治部少将(遠)祖

寛永九年甲午八月八日

寛永年中八月八日御小姓
寛永二年分知三言石

大市青尾友右衛門守祖三言石 初藤野公孫道信通

後七言石

寛永十年辛酉八月七日並御加恩三言石

九六言石

信長京大坂の御書送十言石事度々

延宝二年甲午六月十七日御廣交書三言石

天和二年乙未八月廿二日並御加恩三言石

九七言石

天和三年庚申三月十日禱入彦坂之儀也

祖
元禄九年六月十二日死八十一歳

寛永九申年八月八日

梶合平勝忠活男

慶長十九年別居見取

御書外之人

大御書内後石見守祖 世石 梶治形多清正利

寛永十六卯年七月十六日死六十一歳

正利之息男合平定年后四位下

別子御小姓世石之息男

次男多清正将之次子正利

嗣子正利正清正定年正

管治権太盛正之次男

正利養子正子

あつる小父十實子あせせし
加父の科といはし十後ハリ中
ハ凡事と致せしと

大猷院殿尚世十あせなる志
何のりもせなるやツなりとて
百あさき世十流るの列母風疾
の骨少かうすくとを御む母
かふむは百歳と後り

大猷院殿薨御の后日光の御堂
守りと致せ日光十あせり
兼徳元辰年十日光^ハ後り
女位中^ハ会湯佐十成^ハ通^ハ合

二百あせ後りツ内中祿二千石
とあせす^ハ天和二年十ハ
たわしすく^ハな^ハ成^ハ位^ハ中^ハ
叙^ハと^ハ元^ハ祿^ハ十^ハ宣^ハ年^ハ六^ハ十^ハ四^ハ
年^ハす^ハ八^ハ十^ハ七^ハ年^ハ日光^ハ定^ハ年^ハ
病^ハと^ハなる^ハより^ハと^ハ聴^ハと^ハ百^ハと
常憲院殿^ハと^ハけ^ハあ^ハくも^ハ長^ハ田^ハ
と^ハ在^ハと^ハと^ハり^ハ日光^ハと^ハと^ハと^ハ
定^ハ年^ハの^ハ病^ハと^ハの^ハや^ハと^ハ同^ハと^ハ
治^ハと^ハと^ハ事^ハた^ハと^ハと^ハと^ハ事^ハ
も^ハ也^ハ又^ハ定^ハ年^ハ生^ハ涯^ハ女^ハ犯^ハと^ハ持^ハふ
又^ハ日光^ハと^ハと^ハと^ハと^ハ

大猷院教の眞福を修へて

安福の祈と修へて

念なく且嗣子と撫へ奉る

ふき作あまといはる美々の

この福を譲るんぬの某の目や

あふ魚うす子詮とする亦か

うへん海女の祈願とくく

ゆきまじりゆきとく魚うす

てりねゆきと命ゆき随すを門

く亦飲二千石とくくゆき

日光山の標大黒山と云ゆ

とて能くとゆき
生彦の標師の義なることあり
官と好て標師のやまことす

寛永九年八月八日

南條式部澄秀二男

大御者松平豊前守祖

大御者大友右衛門守祖 二言依 南條式部在御澄成

後世可右

後世在御

寛永十年二月七日並御始恩

二言右式部左の御守御式部の内

少く申さるる也九日可右

澄成系右取の御言請十系と

事一度々

天和二年八月廿七日死

寛永九年八月八日

國領寺主清一右衛門

大洲青松半鐘為改組

大洲青松氏及右見守組三箇十 國領七部有山台次

後百八十石余

寛永十年二月七日並州北恩

二石石武列福毛領のうち勅

作村末長村廿二下々是九

石百八十石余

右次系大坂の若重廿二末

事度々

寛文七年九月十七日死六十八歳

寛永九年八月八日

稀直社舊の改重也復

大御所桂村常力祖

大御所氏後身守祖 言傳 稀直社在遠の正代

後代也
云々

寛永十年二月七日並所加恩

二百石九世也

正代系方取の御言傳中系と事

〜云々

慶安三年八月日御目録

石乞との二百石云々〜奉る

年號月日不知大御番組以

万治三子年二月十八日御目付

寛文二子年三月廿日御目付

年日光の御儀と命とす是

所の和のよも八月廿六日

旗指の料白銀百六十枚と通り

二月御儀と通り

延宝四年八月九日入太夫係

右系免組

延宝六年三月十日教仕と料

二百俵と通り

元禄八年三月廿九日死公九幕

寛永九年二月八日

水野監物勝成忠願

大御番松平豊前守延

大御番丹波守守延 二百俵 水野彦九郎重勝

後新儀

重勝系大坂の宛書中多事

度々

寛文二子年十月十九日富士守番延

寛文十子年二月廿二日死

寛永九年辛卯八月八日

小川新九郎長保次男

南条松平公雲守組

大御所月夜右近守組 三原 小川伊直守忠保

忠保系大坂の宿直中事奉度々

慶安元年

長松表 北條附

之辰以中身と起しと橋田
御殿の御旗炮以中進之又
御持取とかり辰中御進奉り中
至る御七百石と滝りし

寛文六年七月忠保妻血札
 して忠保とくく一乃々さ
 殺しそをも自害して夫
 くるをりて忠保の息男孫を
 女明の遠跡とて流すすして
 川に小深流すあうふ女明の
 異父の兄林伝港守の許に寓居
 一難婁して智深と云ふ子
 小次郎女智と名かこまじ事と
 於此し女秘かくむかしくかり
 今この智深の男求馬忠と名
 云し女も今も又むかしくかりて

てと流後しり
忠保の妻女害とるま
 事まこと小次郎女して
 家の後へ去りしときと忠保の死荒流す
 しくそのゆゑにさす事とまじ
 さわし女も今も又むかしくかりて
 忠保と名しるに奉比のゆゑとありて
 正して遠跡のゆゑに求馬忠と名
 りるとそ世のよのかりりる

寛永九年八月八日

三浦店左衛門五次郎

大御者松平豊永守組

大御者内後石見守組 百石俵三浦長久清並質

後三百石
俵

寛永十年二月七日並御加恩
二百石九二石

同年八月三日赤川小久馬探御洗
の時吉の逸物と褒賞クハ
御赤石石として御加恩守俵と
後九石百俵

延賢系大坂の宿延中系事
度々

寛永三亥年合和と候し治り

万治三子年十二月廿六日御家門切子番之次

天和二戌年十二月廿二日延中如恩

二酉徳九六可徳

天和二亥年八月十日禱入松浦

内倉九祖

元禄二己年二月廿二日死八十二歳

寛永九申年正月八日

延中系在(延)及(延)候

大御前松平詮殿之祖

大御前内後石見守祖 二酉 延中系在(延)為庸

後世可石

為庸系大坂の宿延中系事

度々

寛永十申年二月七日延中如恩

二酉右土記國長柄部長井村にて

治り九世可石

寛永十二子年正月十二日父為庸事

二酉(延)系在(延)延中系事

寛政七年九月廿九日

長松表口被高附

同也

長松表より正白旗と語りたまはるるこの
正白旗は見ゆれば京忠に語りて
幕中中儀さるる

之居高麗次方小舟と記し
橋田沖殿の沙持り改らるる沖如恩
有く七百俵とある

寛文三年二月六日輝入橋田沖殿云渡
延宝七年七月十九日死六十九歳

寛永九年八月八日

田原久造正久為次

大洲藩安部橋津守祖

大洲藩尾友右衛門守祖

宗右田澤久造正茂

後七百六十石

寛永十四年二月七日並河如恩

二百石九十七石六十石

正茂表友人坂の孫云流小島守事

度々

兼務三年六月廿七日死六十二歳

寛永九年 年正月八日

松波平左衛門正義越前

大御番安政御津守祖

大御番月夜右見守祖

右右松波平左衛門正勝

後七百石

寛永十年 年二月七日 亞沙加恩二百石

中認の國のうちにて中さうま九

七百石

正勝系大坂の宿直小倉事度々

延宝元年 年十月廿六日 此六十石

寛永九年八月八日

田村安撫法中長殿三拜

大洲若松平世前守組

大洲若松平世前守組 三郎 田村傳重(長船)

于之府系乃坂の御子孫に奉る

年月日 弟知輝

寛文十戌年十月十日致仕

延宝元丑年九月二十七日奉

寛永九年甲申年四月八日

大御所松平豊永守祖

松平大御所改重惣領

大御所松平豊永守祖

寛 松平源七郎重勝

後二名

改と松平

居守

寛永十年年二月七日新地三百石
上迄の國氏村敷のうちゆを後り
重勝系方改の宛座小倉事度々
寛永十六年八月十二日父改重連所
の事ゆを改易とるは六あえらく
籍居七〜寛永

慶安元子年二月

徳松若冲抱守

慶安三宮年二月徳と旭(後八九
六)百徳

之辰月一冲方の沖小性祖番取
ま〜ゆ布衣と免さる

延宝七未年十二月十六日朝ふ〜
冲役と免さる〜致仕

元禄二年年正月十日死七十七歳

寛永九年 年八月八日

高勲(高)吉屋三男

大洲若月友右是守祖 言徳 太田三太郎長清

後世若 後九(孫)

同年原系三言徳と治り

寛永十未年十二月十日垂冲加恩

二言若乞まての原系三言徳と末知

廿成〜治り武蔵の國那筑那

新羽村にて此言若中さる

寛永十七年 年八月十日死

寛永九年申年比月八日

大坂御具置奉り申上る御意

大坂御具置奉り申上る御意
三浦大目小島清右衛門

後七右衛門

因年原系三右衛門と云

右原系大坂の御意清右衛門

寛永十六年八月八日父先で云

不の料因一々是の透跡と云す

慶安元年六月十四日新御書を以て右御意

寛永九年六月十九日

大御前月夜右近守組 百十俵 山本六郎八左衛門

大御前植村常刀組 百十俵 山本六郎八左衛門

後三百六十石 後七千石
七百石

同年前原系百六十俵と法里

寛永十年二月七日並所加恩

二百石中詔の國首師於大野村

小く中さし九二百六十石

正信系大坂の御寄附より事

度々

慶安元年

徳松若江被為附御守役

之後御加恩二百俵と給と九百六十石

寛文元年 申年 神田御館の御用
人とのり是より六百石加増
有りて千八百六十石ありし
寛文七年 酉二月廿六日此六十石

寛永十四年二月

田沢若江邊 男若江次

元禄七年二月

御若江次

御若江次 見守組 二百俵 田沢若江邊 男若江次

後次傳

島次系大坂の若江次系と申す事度々

之後淺草御藏奉りしと云

慶安元年九月

徳松若江被為附

同年同月 御方の御控頭

寛文元年 申年 神田御館の御控頭

之後又同月 御館の御控頭

寛文十二年三月一日、御館の
御前と居次方お稱出つてきて
六百俵小あり

之、居次男小長後次郎(名)云之
養父(名)喧嘩せり(名)時
實父と(名)せし事(名)あり(名)居次
岡田(名)と(名)作(名)出(名)さ(名)ま(名)し(名)こ(名)ち
天和元年九月八日死(名)六(名)十(名)六(名)歳
居次岡田の中(名)身(名)せ(名)し(名)事
おま(名)の(名)六百(名)俵(名)の(名)帳(名)ら(名)は(名)息(名)男(名)の(名)爲
居次小(名)の(名)三百(名)俵(名)と(名)なり(名)大(名)中(名)書
物(名)に(名)ま(名)の(名)父(名)の(名)遺(名)跡(名)の(名)帳(名)に(名)す

之、居次男(名)と(名)作(名)出(名)さ(名)る

寛永十自年

大洲藩内後石見守組 三右衛門 鈴木伊左衛門重辰

即納言鈴木三郎重辰

重辰の父ハ九を更正と云て
大洲藩と務めしうある元和
九年年世のりくかく出家し
て世とのいさしきふりし
そ子重辰伯父重成よりと
人となり重成のむすぶりて
後出さすく大洲藩小入らる

同年新地二百石と流り
寛文元年辰辰の若由中事度
之辰年月定りありて議事
御藏奉行と兼

兼寛二十一年 月 日 天草平沙代官

同年沙代料子儀と流り
寛文元年辰辰八月 九日京都の
沙代官とあり沙代恩二百石
山城の國守居於本懐村あり
流り九百石又あり
禁裏 院中の御用と兼
作出さるる沙代料子儀と流り

同年六月廿八日沙代恩
河邊の恩賜あり

之後河邊の氏也
禁裏 院中と遠せりて御用と
務免

後水尾帝より沙代料子青儀
の沙番御と流り

寛文十一年十月二日京都北六十
巴幕重辰の骸と山城の國守居於
本懐村の徳化院あり

寛永十一年

寛永九年 年改元

本多左衛門尉光重

元禄四年 中若外へ入

大御番氏友右見守組 言者 本多左衛門尉光重

重忠 駿河殿中仕入御事立一時

源くしくりうらうらもちりもちに在り

きまじりうの月俸と給りし

御くわ大御番小入りまじり

寛永十三年 四知のしりし甲列にして

東知三百石と給り

重忠 京方改の御云清小奉事御事

兼務元年辰年六月二十日大御書組次

之右京大坂の御書通小系と奉
渡く之度毎必白銀十枚時取
二と添ふ

明暦二年八月廿日御書恩二百俵

九十世百石

延宝元五年八月廿日老癖入戸内

海後守組

延宝二年三月廿日致仕之床と云

貞享二年二月二十日此

寛永十二年戌年

寛永十二年被石か

秩父次郎重國為次

元駿河殿元

大御書月夜石見守組 言石 秩父次郎重國

同年新知二百石と添り

重石系大坂の御書通小系と奉渡く

明暦元年未年六月二十日此

寛永十三年

元禄六年三月

小田切店三浦昌五為願

御書印之人

大田茂元後石見守組 百俵 小田切店七郎忠勝

見勝系乃坂の秘言流小系と事の
所之、夫、中、之、傳、と、大、毎、(五、番、十、番、百、番、千、番、)
年、俵、二、百、俵、七、成、一、百、俵、の、
と、事、の、大、ハ、い、う、事、加、也、

云保元 年十月廿二日死二十七

寛永三十八年三月六日

新見是左衛門公勝三郎

大洲青尾村出陣守祖勲臣云種伯父

大洲青尾村出陣守祖 三郎 新見是左衛門公勝

後傳(左)

寛永三十六年三月廿日原系三郎

三郎

正英系大坂の宿直中系三郎

慶安元年九月廿九日

徳松君に被為附

同日同し一州方の小十人共御加恩

百六十歳と云り九三郎守家

寛文元年八月九日館林の
御先弓次少次郎に御書と法里
九の御儀御返料二百俵と法里
寛文元年三月廿二日館林の
御持筒改

同年

御書中御書御書と命せらる
八月八日寛と三十九日系若下八日
系と立本有路と中と九月三日
美の別中御書御書了
延宝七年六月廿六日死六十一歳

寛永十二年三月廿日

大御書月夜御書守祖 言依 本目権之御書次
大御書松平藩殿御書推十郎公室御書

後三百石 改十御書
推十郎

正之居原第三百俵と法里
正次系大坂の御書小系と事御書
寛永十九年 月 日御書三百石
是より御書御書御書

慶安二年六月十九日死

寛永十二年三月廿二日

南書松平詮敏以組世節系譜松平

大津若尾後石見守組 二百俵 是山八云湯系明

後六百石

寛永十六年庚申三月廿二日

系明系石坂の宿在小事と奉り度

慶安元年三月廿二日同日宿在是迄の

二百俵のうへに奉る

天和二年三月十日御書沙門切子番へ

元禄二年三月廿二日御書入彦後守組

元禄二年三月廿二日此

寛永十三年

大御書月夜石見守組

御書物奉り図共存しん歳終領

二言俵 関百町正重

改平二部
六九番

寛永十七年六月廿九日原系

二言俵と記す

正重系大坂の岩屋小島あり

慶安元年七月十九日先二十九日

寛永十六年

寛永十五年

大津青月夜見守組

大津小次郎正次

即青月之人

信鈴

寛文六年八月

信鈴系左坂の御言渡り奉り度々

其度系左坂の御言渡り奉り度々

其度系左坂の御言渡り奉り度々

信鈴

天和二年七月

中津國豊田郡葛原郡猿鳴郡の

うちかてりさる

貞享七年三月九日穉入長坂之役組
元禄六年三月十六日此六十九年

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

寛永十七年三月廿日

寛永十六年三月廿二日被出

長井宿在密の宗清殿

御書外の人

大津藩内及石見守組 長井地十郎正成

政務録

正成父のゆかりと思はれり

白下とて所家小姓(らまき)

今年大津藩中入らる

四年河内國小く百八十比石の
地と云ふ

正成系大坂の幕府中某と奉慶

慶安元年六月七日於大坂城死

宗廟の儀と京都の東邊山禪師等小
送る

寛永十七年六月六日

南書月友名見守祖
言依 松波右衛門重勝

之と原系系二言依と法也

重勝系系之宿直中系と重二度
慶安元年六月十二日新洲南書月友名見守祖

寛永十八己年二月十六日

大津藩元後右見守祖 三右衛門 同澤七郎左衛門 正勝

後名(正勝)

寛永二十二年三月十八日 扇原

三右衛門

正勝系右衛門の孫左衛門正勝

慶安元年六月十日 新津藩馬井右衛門祖

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

寛永十八己未年二月十六日

同井原金成重春子

寛永二十五年 月 日 添目

加書外之人

大井原氏後名見守祖

皆若公同井原金成義量

義量系大坂の御書通中義量年及く

万治三年二月廿二日大井原祖氏

同年三月廿六日所加慰三而後九皆千石

寛文元年二月廿八日二系城の

宥在申事五二所帳白浪十時岐と

皆り乞よりいりも御恩賜何れ

寛文元年秋坂城の法通申事

寛文七未年夏氣の護河次第
寛文十戌年秋坂城の法清次第
延宝元丑年夏二条城の法清次第
あり

延宝七年八月十九日二条城の
御城者御加恩二百石と賜る
同年八月廿二日沙原合戦時坂二
好藏と後記

詳入

祖

貞享二年八月廿九日七十卒

寛永十八己年三月廿日

水上常高先考

南高安親模津守祖

大南高内後右守祖

三傳水上高親正勝

後右右左

正勝系大坂の宿衛中第と事慶
正保二戌年二月廿八日御月六石
是よりその二百俵八返一献
慶安二丑年子伯御殿と遣せらる
奉りと勢免

康應二己年三月九日大南高祖

明暦元未年 月 日二条城の

寛永十八年八月廿二日
注し西後も以恩賜なり

万治元年秋改城の法信也
万治二年八月廿二日御恩二百俵九
八百石

寛文元年秋夏三葉城の宿直也
寛文元年秋秋改城の法信也

寛文六年八月廿二日拂方御記
同年十二月廿八日布衣者と老と
寛文三年六月十八日辞身合中
列す
延宝六年八月九日此

寛永十八年八月廿二日

大御所月夜見守組
大御所月夜見守組仁清盛坊頼
二百俵布施能清盛也

千石原第百俵と云

盛重系乃汝の宿直也

寛文元年八月十八日父秀也
夕の料月一里遺漏と云

寛文六年八月廿二日富士見番
貞享元年八月廿六日此

寛永十八己未六月十日

大御前内后石見守組

御表内書之御小御前之御意取領

二言候小林惣三清三平

改候也

寛永二十二年三月廿八日音原末三言候と

路也

正保二戌年及三亥歳の先照中第子

慶安元子年六月十七日新洲南遠由十言候組

寛永十八己未年七月二十

南無阿弥陀仏見守御 言依 國領 守 言清 重次

後六百八十石余

寛永二十三年十二月十八日原米言依と
論

重次弟乃波の弟並申事申度
寛文六年二月十二日浅草御藏
奉仍と申入し仰と申候
寛文七年十二月十日浅草御八十石余
是よりその二言依の返へ奉る

寛文十戌年 月 日 辰のこく
免さる

福清少代官

御恩言九七言十六名余

之後和列の御代官とあり

天和二戌年六月十日御執定吟味及

和日御加恩二百俵九九百八十名年

二并武相波冬列の御蔵入候と奉

貞享元年九月十日御及と免さる

元禄元年六月十日小普請長久保

玄蕃以祖とあり

元禄十己年三月十日死七十六歳

寛永十八己年

弟念長(佐)是理教願

元禄(辰)免 御寶藏者

大御高内及石見守祖 公若采倉長(佐)信謙

後言二十九俵二年

同年東地八十石と原第二百二十

九俵二年中かゝり候

信謙系大坂の御出立中事と事感

明暦二酉年二月十日死六十七歳

寛永十九年三月八日

寛永十九年波出

依川守丞養子

元波河魁元

大洲若尾友右衛門守祖 号若尾元小守人貞清

貞清始元波河殿也仕中事有て

後海くして無時百くさる

貞清系大波の孫清也事事度々

寛文二亥年十一月八日御杖本奉り

天和二亥年十一月廿日御杖本奉り

因年十一月八日致仕

元禄元年六月廿日此七十八歳

寛永十九年

葛本城守盛之君領

九段門外 沖若部

大御所内後右衛門守組 言者葛本源右衛門盛常

盛常こゝの御河段属せらる

仕事有てのち海くゝるる

衣出さるる大御所がへらる

盛常系ち後の者也と云ふ事候

明暦二年二月十日此

寛永二十九年六月三日

大内善左衛門右衛門守祖 三依 寓内右馬之助宗久

大内善左衛門右衛門守祖 三依 寓内右馬之助宗久

改元後公家

正保二年十一月原弟三依之治り

慶安元年 年六月十日 新井青遠山

十右衛門祖

寛永二十六年六月廿二日

山崎富太郎補佐忠貞領

寛永十九年三月十日被旨

元禄元年小菅藩

大井町田後石見守祖 山崎高孫去清親重

親重とてしつ渡河原小属せらるる

之辰湯くし白飯とて其の地土治り

親重系右取の男並小系也

慶安元年八月九日死七十六歳

正保二年六月二十日

寛永十七年洋目

大洲藩尾花辰三守祖

高倉藩尾花清忠

御書付人

三右衛門大田三六郎辰成

後長七郎

慶安元年六月十日新洲藩駒井左京祖

正保二丙午年七月十日

大御所代後守祖

大御所代後守祖即十郎正家為願

實長井則七正房

後正房則十正房

二正房則十正房

慶安元子年三月十日

比石と後守いさむらと康弟と

正房宗大坂の弟也中弟と弟と

万治元成年六月十日十六依之如

治元九三百石

寛文二癸卯年十月廿六日元方御託戸

正保七年三月廿六日

大御前長尾守祖

大御前長尾守祖命長尾忠勝殿

二言依殿室金部見方

後三言石

後次少少

之右原系二言依と語り

男方系方後の語云信小系二言依殿

寛文五年三月廿八日海目二言依乞返の

二言依ハ一ハ一奉由

本年八月廿九日新編入諸川長尾守祖

元禄七年三月二言依致仕髪と判て

道山と云

元禄十七年二月廿二日死

慶安元子 年二月十日

寛永十六年九月 日誌目

大御番尾後右衛門守祖 言右 権次郎左衛門正将

権次郎左衛門正将

小菅信

正将の兄金平定年 元禄中ハ
左衛門正将

父の養子 實は菅原権次郎の
次男なり

とあり

大猷院殿の御小判をとりて養子

正将にまかせしは父の料と實は

縁起の事と見らるるにやとあり

正将父の御と御屋をわきにあり

慶安元子年八月十日利御書駒井左京祖

定年ハ別々家々として流布也
月と起一ころ日光山の御書守と
かり比佐中の凡そ流布せずサるる
左書流布の傳ハ文治御書流布の御書守の
一ハ慶安元年八月八日の案のすま
あり也ハ中正将又う流布と翻り

慶安元子年七月十日

大御書長初丹波守祖 二言像山角権左衛門正勝

後七百石

御書松平外記祖御書長久親領

そと原原系三言像と流布

正勝系大坂の御書流布中書御書流

延宝六己年十二月十日御目七百石

乞追の二言像ハ返一奉る

貞享三己年九月十九日小當清奉行

元禄三己年七月十日御書定初小石さよとて

知良院と造らせらる御書用と務め

〜ゆきつゆり〜さ母と〜き
河舟小越せす二宅路ハ流飛ハ
處せら〜む子仲出さ〜七百石と
奪集しる

元禄二年奉四月廿日備前免
同奉六月廿日江府小仲と

元禄二年奉八月十六日菅中やちと
利子原弟二百俵と流〜小島清子
入らむ子仲出さ〜彦波を後守祖と
あり

元禄二年奉正月二日秋の〜
年終の賀小出仕了

宝永二年奉六月廿二日死六十二歳

慶安元子年

大御書是初丹波守組

三言徳水末共金三言

後三言

奥方御書水末公室の親好恩領

其後原系三言徳と治也

正幸系大坂の宿願母系三言徳

寛文二言年三月九日跡目三言

是迄の三言徳ハ返一歎也

寛文六言年七月三言徳列の由海州

換分御用と命せらる三言事と格也

坂城の法流より三言九言十言御也

明白中言上

延宝三年 辞入板倉市心組

延宝六年 二月十日 死七十一歳

慶安元子年

深澤後(佐)貞憲三男

大坂御金奉行深澤後(佐)時憲男

大津藩国初丹波守組 二言依 深澤後(佐)貞憲

之右原系三言依と存也

長憲系大坂の寄進中事と存也

寛文元年 丑年 三月 晦日 死

慶安二年三月七日

大御老国政丹波守祖 三右衛門 大保右之助忠次

改九条

慶安二年原系三右衛門

二日交治御在御(忠重)

徳松若十属よりくみか也

元禄二年二月十日

宝永七年三月十日

宝永六年十月十日

慶安二年三月廿六日

大洲藩国初丹波守祖 三右衛門酒井七郎左衛門某

之後廣末三右衛門と云

七郎左衛門某末三右衛門の弟也也事

度々

寛文六年十月十七日初大洲藩奉行

同日酒井加恩三右衛門九郎右衛門

同年三月十六日酒井加恩三右衛門

恩賜多々

延宝正辰年九月十二日家子参りて
相濁一火龍射と歎也

同年十月十六日沙版島金枝時辰
二と治也

寛文六己年六月十九日上方御代官
寛文七年八月七日但馬國出代官
沙加恩百依九百依

元禄三年八月十六日家子参りて
相濁一箱着と歎也

元禄六年八月廿日死

慶安二丑年三月廿七日

御腰物奉り基一氣治治敷願

大洲藩国新丹波守組 三音依加藤甚吉清光政

二と原原第百依と治り

兼徳元辰年夏花花十五りて

兼徳元辰年二月 日歌本為能登守忠義日
沙頭

寛文二年七月廿日歌彼石込元組
大洲藩国新丹波守組一海番

慶安二年

大御所國助丹波守組 三言倭 刻比奈次養清男重

三言倭 刻比奈次養清男重

三言倭 刻比奈次養清男重

三言倭 刻比奈次養清男重

三言倭 刻比奈次養清男重

三言倭 刻比奈次養清男重

三言倭 刻比奈次養清男重

三言倭 刻比奈次養清男重

於此便より石出さまは六所番と
務めくくつりし一々養父
思澄病を篤くしめそのみく
息男をまじひ思重を料わらぬ
と語ららん事と於此一々
思重をまじひ思久に父の實る
ありし是も父の海と語ららん事
いふ事なりとして事と於此
一々事と語ららん事として
をいふことあるをいふとして
寛文二年十一月九日その方の於此の
一々養父思澄の遺跡といふ實る子

六所番の思久も此も思重のそのみの
一々元のまくにゆへと作出
まじひ死のりも能目と
存する一々神妙のいふりあり
との作とある

寛文十成年祥入太保山城守祖

天和三年正月廿九日

